ごとくである。 が法の適用をうけている。宇都宮一族の適用を表にすると次の 少弐など有力御家人の一族や被官(下人・所従・所領住人など) う。ほとんどが宇佐宮・弥勒寺領で占められ、大友・宇都宮・ から派遣し、訴訟の受付、尋ね沙汰、 安楽寺)興行を発表し、安富長嗣・斎藤重行・明石盛行を鎌倉 に行った。その件数は残存史料だけでも七○件に達するとい 強制執行を二年余精力的

野中欠郎太郎	野仲原次郎道興	野仲道性房円空	野仲次郎太郎道雄	山 二郎重安頼房領住人	大和八郎信茂	又三郎・九郎三郎頼房下人	宇都宮頼房	山田千世房丸	"	山田彦三郎政康	山田中内政盛	論 人
下毛郡自己名半今永日也	宇佐郡高家郷大根河免田	下毛郡全得名・世永名	下毛郡麻生郷藍原屋敷	宇佐郡葛原郷光方名内	上毛郡三毛門大路田	上毛郡是吉名内	下毛郡木原村稲重名内	下毛郡久枝名	下毛郡四郎丸名内	下毛郡四郎丸名内	黒土庄内小石原	論 所
共曽坤亳	神官屋形諸成	神官愛輔	神官実世	神官公親	神官田部盛継	官人代宗朋	神官宇佐忠世	権検校高舜	神官宇佐実世	神官並頼・道吽	弥勒寺供僧賢親	訴人
元芯元・八・一九	正和二・八・二七	正和二・六・二二	正和二・六・一二	正和二・八・一六	正和二・六	正和二・六・二二	正和一・一二・二七	正和二・八・一二	正和二・七・二七	正和二・三・一二	正和二・二・二〇	裁許年月日
北	屋形	永弘	永弘	到津	宮成	奥	到津	小山田	益永	益永	宮成	典拠

と宇佐宮神官との関連を長文の裁許状から整理したものであ 御家人側が勝訴するという希な例がある。 れ、文保元年(一三一七)八月、鎮西探題北条随時の裁定で、 黒水・吉武両名五町ばかりの地頭職について大神氏に訴えら この 神領興行で、 本町出身の久保六郎種栄が下毛郡穴石郷 次の系図は、 久保氏

る。

あることが、この系図によってよく分かる 久保種栄が、宇佐宮の神官や弥勒寺の僧侶と深いつながりが

名を所持していたことから、宇佐宮との関係が深まり、下毛郡 へも進出するに至るのである。 久保氏が宇佐宮領貫庄の荘官の一つである弁済使職と、

鎌倉時代の大蔵久保氏と宇佐宮との関係図



第三節 鎌倉幕府の滅亡

挙にその力を浸透させた。 る権力を集中させ、 家 北 条 の 専得制宗 宗と言う。時頼 北条氏の中でも、 元寇の後には異国警固の名の下に九州へ一 執権の座に就く嫡流の家を得 時宗のころから他氏を圧倒す

豊前 配置した。 日向 をあ 大隅を奪っ 肥前を奪 げ n ば、 1, 7 守護職の 大友氏から筑後・肥後を奪 それぞれ一 独占である。 か 国 「の守護とし、 九州 では、 i V 島津氏, 少弐氏 北条一 族 から から

と、

御

内

人

0)

筆頭

(内管領)

長崎高

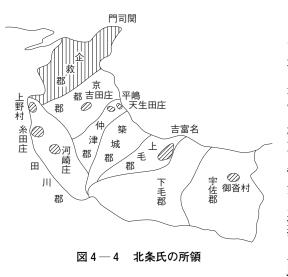
綱

高資父子の発言力

が

強

占め、 として送り込み、 となる地域を押さえて、 同様になったから、 また、 鎌倉末期には、 あたかも平家が全盛期に知行国三○国といわれた状況と 荘園や公領への進出にも熱心で、 全国六六か国中、 権力を背景に悪辣な手段を使ってまでも経済 源平の交代が囁かれることになった。 安東蓮聖のような有徳の御内人を代官 三〇か国を超える守護職 全国の交通の 要衝 を



た。

ることがなくな 庶民の苦しみを顧み 華な生活を送って、

0

力を蓄え、

鎌倉で豪

H. 図 府 のようになる。 の)腐敗 高時

地

域を地図にすると

として判明

している 条氏

豊前

国の北

領

が

幼少で執権になる

え現れ おもねっていた御家人も、 府に対して、 まり、 側 E 北 条一 加わった。 た。 賄賂 族の・ 北条泰時のころのような公平な政治が忘れられた幕 が 御家人の信頼 人々も得宗の顔色をうかがい、 横行して、 政 治の公平さが失われてい いざとなると簡単に幕府を攻撃する 忠誠心はしだい に失わ 御内人となる者さ 0 た。 得宗に

て、 かには、 悪党の 治安を乱し、 横行 諸国を流浪して、 訴した武士や困窮して所領を手放した武士の 神領興行令や徳政令で、 追討される者も少なくなかった。 山賊になったり、 被害を受け、 海賊になったり 裁判に敗 な

断を命じてい 量の仁を選び、 幕 と鎮西探題金沢実政に指示し、 府も正安二年 る。 国々の守護人を相副え厳密の沙汰を致さるべ ()六月、 実政は島津久長に豊後 「鎮西検断の も事、 早く器 の検

御許しい。百日 世 ・永両名へ野仲道性房円空が数百騎の人勢を引率して、 たとえば、 百姓等 座主職を追われた。 0) 住宅を壊 嘉元三年 Ĺ $\widehat{\underline{}} = \widehat{\underline{}} = \widehat{\underline{}}$ 押 領したと、 三月、 神官愛輔に訴えら 下毛郡 野 /仲郷 全得 押し寄

郎入道幸蓮はたびたび施一行に応ぜず、 前国 また、 高 来郡 嘉暦 大豆津 三年 :別符 (長崎県) 愛輔の子身輔 0) 返 付を命 そのため幸運は ぜら 前 ń 輔 た大河 0) 訴 えで肥 所 帯 孫二

嘩に及ばんとした(肥前大川文書)。 ことごとく没収された。幸運は城郭を構え、人勢を引率し、

喧

興行沙汰を承伏せず、 る悪行狼藉を致し、当名に城郭を構えて抵抗した(到津文書)。 豊後国来縄郷内小野名 このような幕府や本所の命令に従わない悪党が各所で発生 の 同じような不満を抱く人々が結集する傾向を見せていた。 変 領 制 源頼朝は武士に参戦を呼びかけるとき、 の長に呼びかけ、 正和五年 (一三一六) (豊後高田市) 恩賞も長に与えた。これを惣 でも、 神官などを刃傷す 小田原宗忍が神 武士団 領

となり、惣領一円相続の制度が徐々に広がっていった。○○年も経過すると、所領が増加しない限り、限りなく細分化し、零細な所領となり、幕府への奉公(軍役・番役等)に耐えし、零細な所領を庶子、子供に差をつけて分け与えた。これが一

領制という。これ以外の兄弟は庶子という。

ほどの勢力になることを意味した。統率力を強化し、これが結集されれば、北条氏にも対抗できる、これは逆を言えば、守護クラスの有力武士にとって、一族の

でいるとき、京都では、大覚寺統の後醍醐天皇が、改革に意欲の**倒幕計画** ないで、政治を厭い、日夜、田楽や闘犬に耽っ**後醍醐天皇** 鎌倉の当主が内管領長崎高資の専横を抑えきれ

て、 が大覚寺統の余流であるという立場は、 対立する持明院統の幕府への働きかけによって、 政 を廃止して、 記 その地位は安定しなかった。 政治に大義名分を求めた。 録所を設置して、 宋学を修めた日野資朝や日野俊基を側近にお 親しく訴訟を決裁し、 しかし、 幕府がある限り、 両統の分裂によっ 先行き希望がもてな 父後宇多上皇の院 譲位を迫られ 後醍 聞天皇

連中が六波羅探題の軍勢に襲われ、美濃の源氏土岐氏や多治見正中元年(一三二四)九月、後醍醐天皇の無礼講に集まった

かった。こうして、

正中の倒幕計画が進行した。

配流された。
護送されたが、日野資朝だけが陰謀の責任を負わされ佐渡島に画が露見したという。日野資朝や日野俊基も逮捕され、鎌倉へ一生岐頼員の妻が、父の六波羅の奉行人斎藤某に告げたため計氏らが滅んだ。

元弘の変 久しく絶えていた南都や北嶺へ行幸し、天皇の**元弘の変** 天皇の倒幕計画は、その後も慎重に進められ、

うと工作した。
きつけ、日野俊基を近辺の武士と接触させて味方に引き入れよ子大塔宮護良親王を天台座主として、近畿地方の寺院勢力を引

われた楠木正成もいたらしい。
日野俊基が接した武士には「悪党楠兵衛尉」と幕府側から言

元弘元年(一三三一)四月、天皇の側近三房(北畠親房・万

里小路宣房・吉田定房) たことから、 時代は急転する。 の一人定房が、この計画を鎌倉に告げ

武藤左近將監ら二〇人は既

滞在を

島津上総入道・大和

に送られて拷問にかけられ白状させられた。 野俊基と醍醐寺の文観、法勝寺の円観らが逮捕され、 鎌倉

日野資朝も殺害された。 その結果、 日野俊基は死刑に処せられ、佐渡に流されていた 文観・円観も配流された。

よって凶徒等を対治のため、 0))趣をもって西園寺家へ申し入れらるべきの状、 叡山に遷幸の事、 防ぎ申すべきの旨、すでに院宣を下さると云々 貞真・貞冬・高氏を差し進ぜらる所也、 仰せに依り執達件の如

元徳三年九月五日

右がぬの 権 頭御判(北条茂時)

相模守 御判(赤橋守時

越後左近将監殿

(北条時益 北条仲時

越後守殿

御教書を成れる人々次第不同

武藤左近將監 (中略) 以上廿人、暫らく在京すべきの由 仰せられお

島津上総入道 大和彌六左衛門尉

潜幸したとき、 これは、 後醍醐天皇が比叡山へ逃れるとみせて、奈良東大寺 幕府は鎌倉より北条貞冬や足利高氏らを上洛

(伊勢光明寺文書残篇)

させると六波羅探題に知らせたものである。

公的形成 的 也是 せいら六四九十九七五五七 の見りい 作了人名战用意丁治生 繁要 以本山门事去了 そな先全更通公 五八元年五月からあ 写真4

大友貞宗軍勢催促状 **- 8** とである。島津・城井高房両 命じ、 和守頼房の子宇都宮高房のこ に上洛していたのか、 い。大和彌六左衛門尉とは大 六左衛門尉の二人も在京して 人は笠置攻めのあと、 いたらしく、追加したらし

向かっている (光明寺文書残篇)。

り大和路をとって、

楠木城に

宇治よ

大和との国境の笠置山に籠城した。この山には笠置寺があり、 鎌倉初期、 八月、天皇は叡山には花山院師賢を変装させて送り、 解脱上人貞慶が中興していた。 自身は

陥落し、 数万の攻撃に耐えているうちに、 坂城に楠木正成が挙兵したが、これも 天皇が木津川に接する断崖の要害によって、一か月も幕府 正成らは行方をくらませた。 河内・大和の国境の金剛山赤 か月ほど抵抗したのち 軍

させられ、翌年三月承久の乱の例にならって、 た。これまでの事件を元弘の変という。 笠置山を落ちた天皇はまもなく捕らえられ、 隠岐へ配流され 帰京して譲位を

叡山から笠置山に向かった護良親王は笠置陥落後、 吉野 0)

山

なった。

中に隠れ け、 城すると、 十一月、 れ、 護良親王も吉野で挙兵し、 周辺の武士にしきりに令旨を発して挙兵を呼び 楠木正成が赤坂城を取り戻し、 再び近畿一 付近の千早城に籠 帯は騒々しく

か

大山 も城を出て摂津へ進軍する勢いを示した。 元弘三年 (一三三三) 二月、 そのころ中国路では、 の麓の船上 山に地元の豪族名和長年に護られて籠 播磨に赤松円心が挙兵し、 後醍醐先帝は隠岐を脱出 楠木正成 伯 耆 き 城し

前司時直が長門・周防予の宇都宮貞泰らを、 北を喫した 、の宇都宮貞泰らを、根来山城に攻めたから、長門探題 上 野四国でも、伊予の忽那海賊が先帝の側に付き、三月一日、伊 周防 両国の軍勢を率い鎮定に向かったが、 敗

探題北条英時を討つ計画を少弐貞経・大友貞宗に持ち掛けて両 畿・中国の情勢を知った菊池二郎武時は肥後へ引き返し、 人の同意を取り付け、 千早城攻撃に参加しようと船で上洛途中、 挙兵の準備をしていた。 備後鞆の の津 · で 近 鎮西

多日 概略を述べる。 と言われ、 所へ出頭したところ、 記 武 0) 方が詳り 兵 時 口論になった。このときの話は、「太平記」より「博 三月十一日、 £ī. ○ 遅参であるから、 真実を伝えているので、それに沿って 騎ほどを率いて到着し、 博多へ非常招集があり、 着到簿に受け付けない 翌日、 菊池 される時

> 切れと言ったので、使者は逐電した。 首を切り、 宿 行動を起こしてくださいと伝えさせた。 所へ使者を送り、 三月十三日、 探題へ差し出 菊池武時は博多の諸所に放火し、 先帝の院宣を持つ御使いが行きますから、 忠誠の態度を示した。大友貞宗は 少弐貞経は使者二人の 少弐・ 大友の

死した。 菊池勢は単独で探題館を攻撃し、 菊池武時以下七○人余が 戦

国して、 武時の嫡子二郎武重と阿蘇大宮司らは戦場を離脱 日向国境に近い鞍岡山に籠城した。 し肥 後 帰

矩高政が任国から急ぎ博多に到着した。 その後、豊前守護糸田 [貞義、 大隅守護桜 田 師る 頼り 肥 後守 護 規き

規矩高政は翌十 六日には肥後の地頭御家人を率い て阿蘇鞍

岡

山に向かった。

流されていた先帝の長子尊良親王を迎えて挙兵したと報じた。三月十七日、肥前より早馬が到着し、江串三郎らが土佐に配 ただちに肥前の御家人等が討伐に向かった。 土佐に配

宗に先帝の していた。 友・少弐・ 三月二十日、 南池・平戸・日田・三窪の六氏あての院の符を**所** 院宣を渡そうとして捕らえられ、 博多の陣内で八幡弥四郎宗安という者が大友貞 斬首され

は 厚⁻ 四 東・伊佐氏らの支持を得て、月一日、伯耆より石見を経て て、 長門探題館を包囲したと門司 長門に侵入した高津 道さ

門に向かって出発させた。 御家人・ 関より知らせが入り、 H 田肥前権守・宗像大宮司・豊前の東四郡の人々を長 翌 二 旦 桜田 師 頼を大将にして、大隅国

厚東氏は自分の城に引き籠もり、 長門国はみな先帝方になったが、 まもなく敵一○○余人を討ち取ったという知らせが 桜田師頼軍が来ると聞い 日田氏らに攻撃されて逐電 届 11 た。

たというところで「博多日記」は終わっている。 そのころ、京都では赤松円心らが七条まで進出し、

六波羅探

ある。

題と交戦していると、 関東よりの使者が語った。

然る如きの輩においては罪科に処せらるべし」(島津文書) 向かい、 守護人の催促に従うべきの処、 四月一日、 守護に命じて、 或いは子息・親類を分け遣わすの由その聞こえ有り、 鎮西探題英時は 御家人の統率を強化した。 「九州の士卒の事、宜しく分国 或いは役所を捨て、 他国に馳 せ 0

の 利 挙 高 氏 兵 四月八日、 心と呼応して京都へ突入してきた。 先帝が派遣した千種忠顕 が、 赤松円

ほども考えていなかったのである。 執権守時の妹を妻としていたから、 幕府は名越高家と足利高氏を上洛させることにした。 彼が幕府を裏切るとはつゆ 高氏は

道 四月十六日、 向 利高氏は山陰道を進み、 かったその日に、 鎌倉軍が入洛した。二十七日、 赤松円心勢と戦って戦死した。 丹波篠村八幡に願文を捧げて、 名越高家は 山 反 陽

旗を翻した。

候の条、悦を為し候、 伯耆国より勅命を蒙り候の間、 その子細 参ぜしめ候の処、 御使に申し候ひおわんぬ、 遮って御同心の由: 恐々謹

(元弘三年)四月廿九日

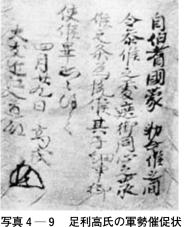
大友近江入道殿

筑後立花文書 高氏 (花押)

氏が言い出すのをさえぎって味方すると言ってきたというので 右の史料は、 高 氏は四月廿七日、 絹の小切れに認めたもとどり文書で、大友氏は高 全国の主な武将へ合力を呼び掛けたが、

に守護職を取り上げられた豪族に元の守護職を与えたらし このころ、先帝は味方に参じた大友・少弐・宇都宮ら北条氏 五月七日から六波羅攻撃が開始され 同月廿八日、 先帝は島津貞久を大隅国守護職に任じてい 九日に六波羅探題は滅

亡した。



足利高氏の軍勢催促状

げ、 ケ崎から干潟を渡って 撃し、二十一日、 H 田 関東では、 鎌倉を目指して進 新田義貞が 庄で反旗 五. を Ŀ かか 野 月 八 玉

鎌倉に突入し、二十二

日北条高時以下自殺して幕府は滅びた。

のことであった。 五月二十五日、北条英時を滅ぼした。 西探題 滅 亡 少弐・大友ら九州の武士は鎮西探題攻撃にかか 五月九日に六波羅探題が滅亡したことを知った 鎌倉陥落から三日後

見候いおわんぬ、よって執達□□、

□月廿五日、武蔵□□亮英時以下□伐の時、舎弟□貞、

疵を被る間の事、

田口孫三郎殿

□三年五月十八日

る。

てもらったものである。

これは下毛郡の

田口信連が、

大友貞宗や少弐貞経にも証判を請い得てい

(豊前田口文書)

傷の現場に宇都宮高房がいたことを証明し 田口氏はこのあと 弟重貞の負 高房 (花押)

宇都宮高房の花押

506